

経験の中から学ぶ設計という仕事

矢板久明 (建築家)

私にとって建築の設計は、日々いろいろな気づきと反省材料を与えてくれる実にありがたい仕事です。ちょっと気を抜けばすぐにほころびを生じ、思わぬ破綻をきたします。しかし、理想を求めながら、誠実に丁寧に臨めば、充実した手応えを感じることができる素晴らしい仕事でもあります。建主や、施工者と共に成長する経験を通し、その時々で発見し、気付いたことに意味があり、それを建築に具現化した智慧にこそ真の価値があると思っています。

設計とはよく聞きよく調べ、未来を描くこと
建主のさまざまな要望を長年聞いていて、実は、本当に必要なことがそこでは示されていないことが多いように感じています。必要なことを明らかにするという事は、実は、その人の未来を描くことに他なりません。ですから、建主にとって必要なことを見つけることも建築家の大切な役割ではないでしょうか。
そのためには具体的にかたちにしてみなければ解る由もありません。すなわち、設計者は建主の未来設計のための触媒のような役割を担うことになるわけです。そうなるのはじめて建主に未来に対する具体的なイメージを描いてもらえるようになっていくのです。私はここを大切にしています。その時々で、とにかくよく聞き、よく調べることを淡々と繰り返していきます。その結果、用意する案も相当の数のにばります。

この段階も終わりに近付くと、プログラムも決まり、基本的な案も固まってくるようになります。しかし、それがうまくいかないこともありました。ある計画で基本設計も最終段階となった頃、設計する側もイメージが膨らみ、自分としても大変気に入った、ワクワクするような提案をしたところ、建主も大悦びで「是非これでいきましょう」ということになりました。
ところが、しばらくして「部屋が大きすぎるので、ひとりである寂しいかもしれない。部屋を小さく区切って欲しい」との連絡がありました。幾日か前に、それぞれに気持ちのうえで合意し、案を気に入っていただくことができたと思っていただけに複雑な気持ちでした。
どうしてこのようなことになったのか……。そこで私は、建主とスケール感を共有できていなかったことに気が付きました。落ち着いて考えてみれば、提案した案に私も建主も夢中になり、本来検討しなければならない課題とは違う方向に意識が向かってしまい、そのために私たちが建主と共有しなければいけない問題をかえって見えなくしていたことに気付かされました。
設計者の提案は大きくプロジェクトを進める原動力ともなりますが、余り強くイメージを出しすぎると相手の要望が見えなくなることを学んだ仕事でした。また、建主のかすかな反応を見過ごし、気持ちをくみ取れなかったのかもしれない。いずれにせよ、私の未熟さを克服するためには通

らなければならぬ関門であったことは確かです。
自ずと形は現れる
建築は人の命を護り、健康を維持増進し、人生を豊かに生きるための器であると考えています。見てよし、使ってよしの道具であって欲しいとも願っています。
この信条を元に、必要なことを調べ、研究を続けます。それぞれの部屋の大きさや、部屋同士の関係を洗い出し、さらに光や風の導き方などを考慮し、空間を生きたものとするための課題を明らかにしていきます。また、敷地の特性や周りの環境から導き出される問題に対して答えることも重要です。要望されていること、必要なことを誠実に、淡々と明らかにしていき、越えるべき課題が明瞭になってきた時、そこに自ずと形が現れてくる感じがします。

頭を白紙に戻して見る
問題や課題の解決のために検討した案は、必ずパースなどの図に表し、比較検討を行います。特に美学的空間的判断をする場合に心がけていることは、でき上がった図を頭の中を白紙に戻し、頭を使わずに見るということです。事務所のスタッフにも頭を使って見るなどいつもいっています。案をつくる時は、頭を使え、よく調べたか、論理的に考えろといわれ、その次の段階に入ると、今度は逆に頭を使うなどといわれるのですか

ら、混乱すること甚だしいかも知れませんが、それが設計の秘訣のように思います。
こうしたやり方は、なるべく客観的に見るための方法ですが、案をつくった理由や根拠を一旦忘れて自分たちの案を見ってみることで。いわば曇った目を晴らして、自分たちの案を建主や他人の立場で見ることを意味しています。
また、設計段階でも現場の段階でもいろいろな問題が発生します。事件といった方がよいかもしれません。しかし、これは気付かなかったことを知らせてくれるチャンスともいえ、これを越えることで、さらに設計をよくしてくれることもしばしばです。また、唐突に訪れるかに思える建主からの変更希望も、頭を白紙に戻して受け止めれば、計画を大きく発展させる機会ともなり得るのです。なにもインスピレーションは設計者だけに下りるものではないのですから。

実用的なるものを概念化する
いつも私の心に浮かぶのは、敬愛するルイス・カーンの“ORDER IS”という言葉です。「オーダーはある。私たちが訪れる前からすでにそこにあるものであり、ただ見つけ出せばよい」。という意味であると理解しています。
そのオーダーは設計過程を通して、各部屋の関係や、敷地と建築との関係等、徐々に浮かび上がってきた秩序の中で、その成立条件を外してもそこに残る空間的骨格やフォルムがオーダーで

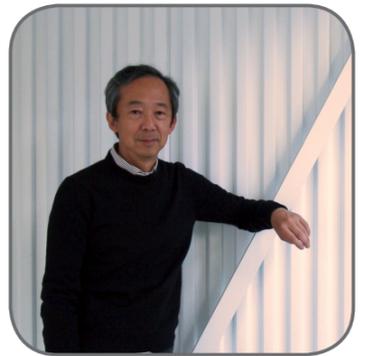
あると考えています。すなわち、実用的なるものの中に、変わらざる価値を見つけ出すことに他なりません。
さらに空間的骨格を補強するため、設計も最終段階を迎える頃、建物全体を立体的に統べるプロポーショナルを探し、空間の成り立ちを検証します。プロポーショナルに対しては、意識しすぎると、思考が自由でなくなり縛られるので、最初は意識しないように設計を進めますが、最後には不思議なほどに見事な数的秩序が現れてきます。萎縮していた部分は全体の中で膨らみを得、大きすぎた空間は適切な大きさとなり、調和した心地良い空間が出現します。この時こそ私が探していた隠れたオーダーとの出会いの瞬間です。「はじめまして、あなたでしたか」。

概念を着地させる
建築空間を快適に、豊かにする鍵はディテールにあることはいまでもありません。
よく聞き、よく調べて空間に置き換える設計課程は、非常に客観的で、論理的な作業ですが、一方、より人の肌の近くにあるディテールを考える時は、主観的な思考で、建築を触るように、あたかも建物を着るような気持でデザインすることになっています。カーテンなどは本当に建主の肩に掛け、その人が生き生きと見えるような生地を選ぶことにしています。
論理的で客観的な思考で得た概念を着地させ

るためには、このようにまったく逆の主観的な思考が必要となってきます。

建築が自分の体の延長のように感じる時
私が独立する直前、両親のための山荘（南軽井沢の家／本誌9401）を建て直す機会が訪れました。慣れ親しんだ土地に建てる山荘でもあり、設計はスムーズに進み、大きな模型で主空間のデザインをしている時のことでした。「この窓なら朝日が入るので、さわやかな朝食となるぞ。階段の踊り場に窓を開けるとよく風が通るな。その上に窓をつくれれば、窓からの光は壁に当たって部屋を明るく照らしてくれるな」といいながら模型を覗いていると、あたかも私の頬に風を感じ、日が壁に当たる様を考えていると、自分の体に陽があたって暖かさを感じている自分に気が付きました。とても不思議な感じがしました。自分の体と建物が一体になったようで、建築が私の体の延長のように感じられたのです。とても楽しい気持ちになったことを記憶しています。建物ができ上がって実際に 中に入ると、模型で想像した通りの気分がさせてくれる空間がありました。「そうだこの感覚を大きな建物を設計する時にも目指せば良いのだ」と気づき、これが自信となって、事務所を構える際のきっかけとなりました。いわば原体験ともいえる経験でした。今もこの時のことを思い出し、この感覚を目指しながら仕事を続けています。

やいた・ひさあき
1979年明治大学工学部建築学科卒業 / 1982年
東京大学大学院修士課程修了(廣部研究室) /
1982~93年谷口建築設計研究所 / 1994年矢板
久明建築設計研究所設立 / 1995~99年工学院
大学非常勤講師 / 2004年~矢板直子と共同主宰
/ 2005年矢板建築設計研究所に改組 / 1999年
「ケアハウス・リハビリティガーデン」(『新建築』9908)
で彩の国さいたま景観賞・越谷市建築景観賞受賞
/ 2000年『CASA TRIADE』(本誌9806)で住宅金
融公庫賞受賞
http://www.yaita-associates.com



大切なことは、実用的なるものの中に、
変わらざる価値を見つけ出していくことだと考えています。